



GCL Summer Camp Redesign of Society 参加報告 JPHACKS GCL 生を含む受賞チーム紹介

(本号は、GCL Newsletter のバックナンバーから再編集したものです。所属等は掲載当時のものになります。)

■ GCL Summer Camp



9月7日(日)、8日(月)に、GCLの合宿が行われました。当日の様子について、山本瑛美さん(教育学研究科M2)にレポートしてもらいました。

(以下、山本さんの執筆)

9月7日(日)と8日(月)の二日間にわたり、東京大学検見川セミナーハウスにてGCL Summer Camp in 2014が行われた。テーマは、「日本の『稼ぐ力』創出委員会など、政府が進められている議論から社会的課題を抽出し、ICTを基軸とした解決策を提案すること」。GCL生だけでなくRA、学内外プログラム担当者、GCL特任教員、指導教員の方々も参加され、白熱した議論がなされた。

1. 講演

Summer Camp最初のプログラムでは、社会技術研究開発センター・シニアフォロワーの奥和田久美氏が「ビッグデータによってもたらされる第4の科学、第4の産業革命」に関して、経済産業省経済産業大臣官房審議官の松永明氏が「日本の『稼ぐ力』の創出に向けて」というテーマでご講演下さった。知識社会となりつつある現在では価値を見出す能力が求められる事、中長期的視点で産官学が連携して今やるべきことを考えていく必要がある事などが指摘された。

2. グループワーク

講演後、コース生及びRAで構成された4つのグループに分かれ、各グループで具体的な社会的課題に焦点を絞り、それに対するICTを用いた解決策を話し合った。事前課題で各人が考えてきた課題及び解決策を基

に、グループのメンバーが自分の得意分野を活かしながらグループワークに参加した。

3. 懇親会、ショットガン・セッション

夕食は立食パーティーで、先生方や他学年の方々と交流できる貴重な機会となった。懇親会の終盤では7・8月のプレゼンコンペの表彰式も行われた。

懇親会後はGCL生及びRAの全員が1分間で自身の研究テーマを発表した。自分の研究に必要な分野の協力者募集の呼びかけがされるなど、「今後のコラボレーションの基盤を培う」というSummer Campの目的にも適う有意義な時間となった。

4. 発表

1日目の夜及び2日目の朝に仕上げを行った上で、各グループが議論の内容をスライド1枚にまとめて発表した。アビリティタンクを用いた障がい者と経済活動とのマッチングや、既存の施設等を利用した観光情報の発信及び健康状態管理ウェアラブルデバイスの併用による外国人旅行者の誘致、文脈や感情を考慮した翻訳ツールによる外国人労働者のコミュニケーション支援や、バーチャル・リアリティを用いた五感・感情の追体験と、個性あふれるアイデアが出された。奥和田氏をはじめとするGCLの指導教員の方々から質疑応答もあり、踏み込んだ意見も多く出された。全グループの発表後、経済産業省産業再生課長の河西康之氏からコメントをいただいた。様々な分野の学生が集まることで新たな可能性が広がることを、強く感じることができた2日間だった。



※本記事は、2014年09月発行号(No.12)に掲載されたものです。

Redesign of Society 参加報告

2014年9月9日～28日、GCLコースのM1学生7名がフィンランドに渡航し、アールト大学のAalto ARTS Media Labで行われた集中コース「Redesign of Society（社会のリデザイン）」に参加しました。

Aalto ARTS Media Labはヨーロッパにおけるデザイン学有力拠点で、この集中コースはGCL生の受け入れを前提とした企画として開催されたものです。参加した学生の報告を抜粋・編集して掲載します。

●伊東謙介さん（学際情報学府・M1）

我々が通ったAalto Universityはフィンランドの南端ヘルシンキの海沿いにあり、バス通学の際にはいくつかの小島を横断しなければならなかった。フィンランドの9月は丁度日本の10月後半から11月に近い。寒い朝の通学は若干大変であったが、澄んだ空気と美しい紅葉が成す落ち着いた雰囲気は渡航前に私がイメージしていたフィンランドの（ムーミンの）世界観以上の美しさだった。

プログラムは主にメインのキャンパスで行われた。Aalto大学はフィンランドの著名な建築家兼デザイナーの名前が由来であり、いくつかの建物はAaltoによるものである。それ以外の建物も彼の作品と色調を合わせた赤レンガ造りのものに統一されており、森の緑と海の青に赤が映える美しいキャンパスであった。

プログラムに参加した生徒が、年齢も国籍も非常に多様であった点が印象的だ。ヘルシンキという町全体が私の想像よりはるかに国際化しており、海外経験の浅い自分にとっては非常に新鮮であった。

ヘルシンキは東京と比べれば規模も小さく人も少ないが治安はトップクラスであり、遅くまで飲み続け深夜に帰宅することが何度かあったものの危険や不安を

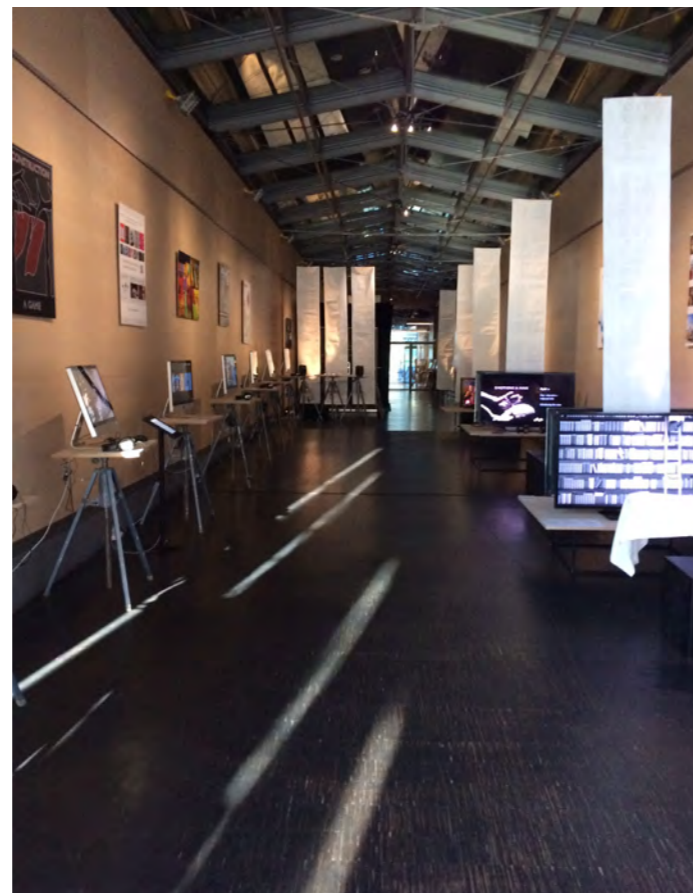
感じたことは全くなかった。

公共交通機関の時間が正確であり、バスや路面電車が専用カードでスムーズに乗り換え出来るため不便を感じることはほとんど無かったが、渡航中に一度ストライキがあり全ての路面電車がストップしたことは新鮮であった。また事前に知ってはいたものの、市内で働く全ての人が英語が堪能である点には驚かされ、フィンランドの教育水準の高さを痛感した。

プログラムの最終成果発表と学内Media Lab創立20周年記念パーティーはキャンパスとは離れた場所にあるAalto Media Factoryにて行われた。商用ビルと一体化したこの施設は決して広くは無いものの、3Dプリンター等の最新の設備と美しいインテリアに囲まれており、さながらIT企業のオフィスであった。当初そのこだわり様に困惑したほどであったが、テクノロジーとアートに注力するAalto大学ならではの施設と言えるだろう。

このようにMedia Factoryでの一連のイベントは私にとって特に目新しく貴重なものであった。

恐らく国内にはこのような文化を持つ大学は、総合大学、美術大学、技術系の大学全てを含めてもほとんど存在しないだろう。



(左) アールト大学の建物は赤レンガ造りに統一されている。(上) 3D最新の設備と美しいインテリアに囲まれたAalto Media Factoryは、さながらIT企業のオフィス。(写真提供：伊東さん)



現代社会において起きた問題点を書き出し、ホワイトボードに貼る。この後はテーマによりグループを分けた。(写真提供：詹さん)

●詹翊加さん（学際情報学府・M1）

大体午前中はゲストの講義で、午後からグループワークでした。午前のスピーチはそれぞれのテーマがあって、例えば法律と著作権、環境保護、テクノロジーと未来などです。午後のグループワークでは最終報告を除き、四つくらいの発表があって、それぞれ2040年の未来生活想像、現今社会において起きた問題点のまとめ、ディストピアの社会などでした。

オープニングとして、2040年の社会を想像して発表するグループワークを行いました。私のチームでは、未来の生活は、ロボットが現状よりもっと皆の生活を支えるだろうと考えました。他のチームの発表では哲学的なものもあり、想像が難しいような社会もありました。

今回の授業で一番好きな部分は、やはり午後のディスカッションの部分でした。クラスメイトは皆がそれぞれ違う背景を持っていて、特にアジアと欧米人の考え方は違うと何回も思ったからです。この困難の上で、頑張って自分の意見を出さなければならないし、相手が納得するまで説明しないといけないので、ディスカッションはすごく挑戦的なものでした。

今回のインターンシップでAalto大学の学生たちと友達になって、いつも昼ご飯を一緒に食べていました。昼ご飯の時間では国や文化の違い、または午前中の授業に対して自分の感想を話して、交流しながらもたまたま発言にびっくりすることもありました。



●連テイテイさん（学際情報学府・M1）（日記形式の報告のため、一部の日付を抜粋）

9月11日 午前中はJack Whalen先生から民主運動、そして漁業についてのレクチャーでした。ランチは食堂で済ませて、午後いくつかの主題を設定し、グループごとに自由に議論を行いました。私は「権力の源泉とレイヤーから見る政治の行方」のチームに参加しました。一番印象深いのは、フィンランド人の学生が自分の意見に執念を持っていて、簡単に他人の意見に影響されないことです。夜はイタリアンのファミレスで夕飯を食べました。

9月24日 グループによって朝の集合時間が異なるため、みなさんは各自にToolo Towerから出発し、いつもと違う方向でアールト大学のアラビアキャンパスに向かいました。最終発表に向けて13時まで各グループは、スライド案やポスターの準備などをやり続けていました。アラビアキャンパスの食堂は図書館とつながっていて、透明性が高く心地よい空間でした。そこでランチを食べて、午後一時から最終発表が始まりました。五つのグループは、それぞれ「freedom」「commons」「employment」「transparency」「redesign criteria」の視点から、様々な手法を用いてUtopiaコンセプトを説明しました。大胆で斬新なアイデアばかりで印象深かったです。



参加したコース生が捉えた、興味深く感じられた光景(写真提供：(左) 菊池智矢さん、(上) 山口揚平さん)

■ JPHACKS GCL 生を含む受賞チーム紹介

2014年12月13、14、20日の3日間に、日本最高峰の学生向けハッカソン「JPHACKS」が開催された。東京大学が主催し、GCLと情報理工学系研究科が共催、運営は株式会社ギブリーが行った。32チーム110人の学生が参加し、「テクノロジーを駆使して、人々の生活を劇的に変える〇〇を開発しよう」というテーマのもと、グランプリを目指して発想力と技術力を競い合った。

本記事では、GCL生を含む受賞チームとそのプロダクトについて、各チームのGCL生一人ずつに質問に答えてもらった。



(写真提供：ギブリー)

質問事項

- (1) チームメンバーのJPHACKS参加のきっかけ。
- (2) 着想やプロダクトの概要、特徴について。
- (3) 今後プロダクトをどう発展させるのか。あるいは、別のプロダクトに取り組むのか。
- (4) JPHACKSに参加しての感想。
- (5) GCLでの活動が、JPHACKSでの活躍に与えた影響。

Sight

チーム：200 OK

回答者：和家尚希さん（情報理工 M1）

(1) 僕が何か面白いことをやりたいとメンバーの伏見君に相談したことがきっかけです。

鈴木君は共通の知り合いだったので声をかけることができ、宗像君には伏見君が声をかけてくれました。(2) Sightは我々に、新しい世界の知覚の可能性を与える、感覚拡張デバイスです。このデバイスは視覚情報を音情報に変換し、聴覚に流し込むことで新しい世界体験を提供することができます。さらにこのアイデアは、脳は細胞レベルであらゆる感覚入力に対して適応し、情報を処理できるという科学的な知見に基づいております。

もちろん環境音は従来通り聴くことが可能なので、従来の音に加え、新しい背景音が追加されて聞こえるようなイメージを持っていただければと思います。Sightはエンターテインメントとしてだけではなく、視覚補助としての医療への応用であったり、危険な現場での作業の補助といった産業への応用も期待できます。さらには、人間の脳の能力の限界に挑戦したチャレンジングな取り組みでもあるのです。

Sightは、鈴木君の「楽しく散歩ができるものを作りたい」というアイデアから始まりました。

感覚が拡張されると世界に対してより豊かな知覚が可能になり、散歩していてもきっと楽しいはずだという発想が生まれたのです。

(3) Sightは今後も継続的に開発を進めてゆきたいと考えております。Sightには音への変換アルゴリズムなど、まだまだ改良すべき点がたくさんありますが、まずは視覚補助器具として、具体的な改良の方向性を考えている段階です。このチームでは今後も新しいプロダクトの開発に取り組んでゆきたいですが、具体的な内容に関しては、まだ決まっておられません。

(4) 4人で作りたいものを作ることができ、たいへん楽しかったです。また、実際にSightがアウトプットとして得られたため、充実した企画になったと考えております。

(5) GCLでは常に様々な研究背景を持つ学生とコラボレーションするため、GCLで活動をしているだけで、アイデアを共有する能力が培われているのではないかと考えます。そういった経験が、コンセプトの価値を多様な価値観をもつ人々に伝える能力に結び付き、Sightのプレゼンテーションにも反映されたのではないかと思います。



(写真提供：ギブリー)

Heart Cloud

チーム：Cyberia

回答者：曾我遼さん（工 B4）

(1) 私たちは、もともとチームサイベリアという会社を引き継ぐメンバーでした。この会社では、技術先行型ではなく、ロボット設計・機械学習・プログラミングにおける高い技術力を用いて、技術力がうまく投入されていない分野の課題を解決することを目的とする、課題先行型のプロダクトを開発しようとしています。

今回は、代替わりに合わせて、チームの結束力を高め、今後の自社サービスのモックアップを作りたいと思い参加しました。

(2) 人間のヘルスケアというと、早寝早起き・定期運動・食生活を基本とした個人の生活改善によって、直すもの、ないしは直すべきものととらえられています。

本当にそうでしょうか。

人間の健康には、身体的なものとは別に、精神的なものがあります。

うつ病など、精神的な病にかかった人の多くは、かつて「自分はうつ病にかかるとは思っていなかった」「うつ病は甘え」と思っていたそうです。また、多く

の精神的な病において、自力で問題を捉え解決することができない状態になってから病院へ行く人がほとんどです。これは、自分では精神を健康に保ちきれないということを示すと考えました。

このプロダクトでは、家族や会社など、個人と密接にかかわる集団において、精神状態を管理することで、未然に回復を測ることを目指します。

【特徴】

「集団で」メンタルヘルスケアを行うというポイントとともに、本プロダクトでは脳波を用いて“主観的な”メンタルを“客観的に”示す点が特徴的です。

メンタルヘルスを病む人は、弱いものとしてこれまで扱われてきたために、カウンセラーにかかることをタブー視する傾向があります。

数字という客観的なものを、メンタルへの判断に対して挟むことで、タブー視する傾向を改善しようというねらいもあります。

(3) 脳波から心理的健康度を測ることについては、さまざまな問題点があります。

- ・脳波計がファッショナブルではない。
- ・脳波計にのるノイズ
- ・長時間の脳波測定から心理状態への変換について、十分な知見がない。

そこで、まずは臨床心理士によるカウンセリングサービスを作ることクライアントを獲得し、得られたクライアントから取得したデータを基にHeart Cloudを実現したいと考えています。

(4) JPHACKSで、大力先生をはじめとした大人の人たちにプロダクトを見ていただき、ビジネスに対する視野、技術に対する視野がとても広がりました。今後は、JPHACKSがさらなる発展をとげるために、微力ながら力を尽くしたいと考えています。

(5) ティータイムハッカソン（東大女子学生向けハッカソン）で運営側として、参加学生のアイデアをブラッシュアップした経験が、とても生きたと思います。

TISPというi.schoolのサマープログラムに参加した際、デザインシンキングやイノベーション・面白いアイデアを生み出す考え方について1か月にわたり学びました。それを基に、客観的にほかの人の出すアイデアについて、「どういう問題点があるか」「どういふふうによくすればよいのか」ということを徹底的に考えたことで、サマープログラムでの一過性の体験が自分の中に定着し、今回のアイデアを生み出したのだと思います。

■イベント告知

◆ 2015/05/12 Global Design Seminar : 「決済から金融を考える」

本講演会は、GCL プロジェクトインキュベーション機構、特定非営利活動法人グローバルビジネスリサーチセンター、東京大学ものづくり経営研究センターの共催により開催されるものです。

参加方法：学生無料

事前申込が必要です。定員になり次第締め切ります。

申し込み方法については GCL 公式ウェブサイトからご確認ください。

今回は、アフラック シニアアドバイザー 木下信行氏に「決済から金融を考える」についてご講演いただきます。

[日 時]

日時：2015年5月12日(火) 18:30～21:00

※ご報告は19:00開始となります。

[テーマ]

「決済から金融を考える」

[報告者]

木下信行

アフラック シニアアドバイザー

[場 所]

東大「ものづくり経営研究センター」

住所：〒113-0033

東京都文京区本郷 7-3-1 東京大学経済学研究科

学術交流棟(小島ホール)5階

電話：03-5841-0687

(東京メトロ丸の内線本郷三丁目駅より徒歩6分

都営大江戸線本郷三丁目駅出口4より徒歩3分

* 東大構内へは「懷徳門」よりお入りください。)

[共催]

GCL プロジェクトインキュベーション機構／東京大学ものづくり経営研究センター

[参加費]

・一般 2,000円 学生 100円

・GBRC 会員は会員特典で参加費無料。

・MMRC と情報理工 GCL にかかわる教職員は参加費無料。

・東京大学の学生は参加費無料。

《問い合わせ先》

GCL プロジェクトインキュベーション機構

pim[at]gcl.i.u-tokyo.ac.jp

([at] を @ に変えて送信下さい)

◆ 2015/05/13 Global Design Seminar: "Roadmap to 5G: What Potential for Cloud Computing?"

2020 年ごろ展開予定の第 5 世代携帯網の技術の現在の展望と、標準化の展望を紹介し、主に欧州での標準化の活動について議論を行います。

日 時： 5月13日(水) 14:00 - 16:00

場 所： 東京大学工学部 2 号館 電気系会議室 4 (12 階 121B1 号室)

タ イ ト ル： Roadmap to 5G: What Potential for Cloud Computing?

講演者： Dr. Tarik Taleb, Aalto 大学

使用言語：英語(通訳無し)

お問合せ：GCL プロジェクトインキュベーション機構

pim[at]gcl.i.u-tokyo.ac.jp

([at] を @ に変えて送信してください)

編集・発行：GCL 広報企画

(森友亮(情報理工 D1), 荒川拓(学際情報学府 M2), 渋谷遊野(学際情報学府 M1), 柴山翔二郎(工 B4), 曾我遼(工 B4), 小川奈美(文 B4) ※所属は 2014 年度のもの。)

発行責任者：木戸冬子(特任助教)

〒113-8656 東京都文京区本郷 7-3-1 東京大学工学部 3 号館 235 号室 GCL ラボ

E-mail: pr_plan@gcl.i.u-tokyo.ac.jp

※表紙の写真：JPHACKS 開催中の参加者の様子(撮影：森友亮)